

第196回（令和元年11月24日施行）

基礎簿記会計

第1問〈帳簿記入についての出題〉

具体的に帳簿に記入するために必要な内容の理解を文章の正誤判断により問うている。

1. 記帳の証拠となる証ひょうに関する出題である。記録された帳簿とともに証ひょうも保管されることを確認している。
2. 帳簿記録を訂正する際の手続きの出題である。簿記ではすべてを見えなくしてしまうような訂正をしないことを確認している。
3. 帳簿を締め切る際の複線（二重線）に関する出題である。貸借合計金額が一致して帳簿を締め切る場合の複線について確認している。
4. 簿記上の取引の意義に関する出題である。記帳の対象となる事柄を確認している。

第2問〈簿記の出発点である仕訳（複式記録）を問う出題〉

帳簿記入のための手続きは、仕訳帳に記入することから始まる。そこでの仕訳とは、取引によって増減変化した資産、負債、純資産（資本）、収益、費用の勘定科目を、金額と共に左側（借方）または右側（貸方）のいずれに記入するかを決定することである。ここでは基礎的な取引について仕訳の理解を問うた。

1. 商店連合会を運営するための事務所の賃借料を支払った取引である。現金（資産）による支払いと、支払家賃（費用）の発生の記帳を問うている。
2. 商店連合会を運営するための事務所で発生した水道料金を支払った取引である。1.と同じく現金（資産）による支払いと、水道光熱費（費用）の発生の記帳を問うている。
3. 銀行預金（普通預金）から生じた利息を受け取った取引である。受取利息（収益）の発生と普通預金（資産）への入金記帳を問うている。
4. 運送会社における運送代金を受け取った取引である。現金（資産）の受け取りと、運送料収入（収益）の発生の記帳を問うている。
5. 商品売買業者（美術商）が商品を購入した取引である。商品（資産）の購入と、現金（資産）による購入代金の支払いの記帳を問うている。
6. 商品売買業者（美術商）が商品を販売した取引である。商品（資産）を販売し、引き渡すことによって商品販売益（収益）を獲得した際の記帳、また商品代金を後払いで受け取る債権である売掛金（資産）が記帳できるかを問うている。
7. 後払いで販売した商品の代金を受け取る債権である売掛金を回収する取引である。普通預金（資産）への入金による売掛金（資産）の減少の記帳を問うている。

8. 取引銀行から現金を借り入れる取引である。借入金（負債）による現金（資産）の増加の記帳を問うている。

第3問<日記帳から元帳への転記に関する出題>

帳簿の基本的な形は、日々の取引を記録する日記帳と、管理すべき単位（勘定）の記入簿（元帳）の2つである。本問では、日記帳としての仕訳帳に記入されている取引を、勘定科目がまとめられている元帳へ転記するという手続きを問うている。具体的には、仕訳された勘定科目が元帳の仕訳された側（借方または貸方）に、日付、摘要、仕丁および金額を適切に記入できるかを試している。

第4問<会計報告書（収支計算）の作成に関する出題>

会計期間の収支計算を示すことによって会計報告とする場合には、前期繰越金から出発し、期中の活動による変動を経て、次期繰越金に至る過程を示す会計報告書を作成する。

本問では、会計記録をまとめたものとして1か月分の町内会の取引を記帳した現金出納帳が示され、その資料から会計報告書（勘定式）を作成できるかを問うている。解答に際しては、【解答にあたっての注意】にあるように、複数ある収入項目と支出項目を「元帳の丁数」順で配列しなければならないことに注意する。

第5問<会計報告書（損益計算）の作成に関する出題>

期間損益計算を行う営利企業を対象とする会計報告は、期末の財政状態を示す貸借対照表と、当期の経営成績を示す損益計算書の2つの会計報告書を作成することによって行われる。本問では、与えられた元帳の各勘定科目の残高から貸借対照表と損益計算書を作成できるかを問うている。解答用紙に勘定科目をあらかじめ示してあるので、作成に際しては、金額を誤らないように記入し、その上で当期純損益を算出するという手順が理解できているかを試している。